On the "Moji-Kotoba" (Ⅱ)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23275

文字詞について（II）

—近世語研究（その二）—

深井一郎

はじめに

さきに「文字詞について（I）」と題して，これまでに目にした「文字詞」を五十音順に配列した「文字詞一覧」を発表した[註1]。本来ならばいま記そうとする内容が先に述べられ，後に一覧が出されるべきものであろうが，若干の点で考えがまとまらなかったことと，一般に求められるのは，私個人のささやかな論説よりも，具体的な資料の方が強いものであることをかんがみ，あえて「文字詞一覧」を先にしたのであるが，一年の猶予は，かならずしも，なお充分な考察を加える日時ではなく，いま述べようとする内容が，いまだにきわめて不充分なものであることを認めざるをえない。しかし，所論と資料が，本来一体として存するものである以上、あまり日時を隔てることは，やはり，よくないことと言わざるをえないであろう。なおいくらかの不満を残しつつ，今回，解説と検討を記述した所以である。

本稿では，文字詞とは何かという定義から入り，その発生の由来と変移の様相，文字詞の形態上・意義上の分類，女房詞内部における比較による特性の分析などを考究してゆく予定である。

I　文字詞とは何か

「もじことば」（文字言葉・文字詞）という語について，小学館の「日本国語大辞典」は，『女房詞のうち，ある語の頭の一音ないし二音にもじという語を付けたもの。さらに接頭語「お」「ご」を付けたり，まれに接尾語「さま」を付けたりしていっそう丁寧にする。たとえば「はずかしい」を「はもじ」「おはもじ」「おはもじさま」などという類』と解説している。語形・用法にわたって，まことに簡明な記述である。なお，若干専門的な辞書の記述を見ることにする。（下線は筆者）

㋑「**国語学大辞典**」[註2]「文字詞」の項はない。

女房詞。室町時代ごろ御所や仙洞御所に奉仕する女性、つまり女房の間で用いられた一群のことば。この名称の初出は「大上臈御名之事」。主として食物関係のまたその他女性特有の生理等の不快感・不潔感などを喚起しやすい事物の明示的な名称を直接口にするのをきらって，代わりに独特の婉曲表現を用い言い換えたもの。〈中略〉もっとも普通に用いられた婉曲表現としては，文字詞と呼ばれるものがある。鯉を「こ文字」，蛸を「た文字」という類で，語頭を残してあとを略し，代わりに「文字」を添えるものをさす。また「もじ」を添えない言い方もよく用いられた。饅頭を「まん」，蕨を「わら」という類で，蛤を「おはま」というように「お」を冠する場合もある。香の物を「かうかう」，干鮭を「からから」というように，繰り返しを使う場合も多い。〈中略〉優雅な上品なことばとして宮廷を離れてしだいに拡がって行った。〈下略〉

㋺「**国語学研究事典**」[註3]「文字詞」の項はない。

女房ことば・廓ことば。女性語の一種。とも

昭和57年9月16日受理

に女性中心の狭小な特定社会で使われ始めたことばであるが，女房ことばは優雅さのゆえに，廓ことばは風俗的魅力のゆえに一般の女性語に大きな影響を与えた。一般語になったものも多い。

〔女房ことば〕内裏や上皇の御所で女房たちが使い始めたことばである。広く公家社会でも使用され，後には将軍家や大名そのほかの武家さらに庶民の女性の間に上品な語として広まった。〈中略〉近世では「女中ことば」「御所ことば」「大和ことば」などとも呼ばれた。狭義には『海人藻芥』や『大上臈御名之事』に女房が使用する異名として記されている語，および同じ造語法によって造られた女性語をいい，やや広義には堂上の女性の特徴的な語をも含める。広義には近世に増補されたある種の敬語や雅語をもいう。発生の原因には，婉曲表現説・言語遊戯説・待遇表現説・忌詞説・隠語説などがある。〈中略〉命名法・語構成にはいくつかの型がある。〈下略〉

㈧「**国語史辞典**」註4「文字詞」の項はない。女房詞。「ひもじい」「おかべ」など，御所の女房たちが考案し，使用していた特殊な語彙（それらが普及して一般社会の普通語となったものも含める），及び女房詞の造語法や命名法をまねて造られた単語を指す。〈中略〉女房詞の発生については，語によってさまざまな動機が考えられる。遊びやたわむれ，女らしく優美に可愛らしく表現したいという気持，あるいはそれらがからまり合って，かりそめに言い出された言葉が，閉鎖的な環境の中で，仲間意識や特権意識に支えられて，いつの間にか固定していったものであろう。〈中略〉女房詞の一つの特色は，その造語法や命名法にある。以下，その特色を列挙しよう。語の省略による造語。なす（なすび），にやく（こんにゃく）。省略し，くり返して造語したもの。するする（するめ），かうかう（香の物）。「もじ」を付けたもの。すもじ（鮓し），ゆもじ（湯具），おはもじ（恥かしいこと）。対象の性質，印象，対象から思い浮かぶ連想等によって命名したもの。長いおなま（鱧），くちぼそ（かます），あかあか（小豆），いしいし（だんご），かべ（豆腐）。「もの」の接尾による造語。しろもの（豆腐・塩），あおもの（菜），おしわもの（梅干）。そのほか，むらさき（鰯），やまぶき（鮒），かちん（餅）など語源に諸説あるものもある。〈下略〉

以上，主要と思われる辞典類の記述を抄出したが，「文字詞」の定義としては，『「女房詞」のうちの一種であり，もとの語の頭の一音ないし二音を残して，これに「もじ」という語形を付加したものである』という点では共通の認識に立つようである。ただし，いずれもが題目としては「女房詞」であって，「文字詞」という直接的な表題を掲げたものではないために，正確に「文字詞」の定義というわけにはゆかないところがあるわけである。いま，仮りに上記の如く定義したとして，それは，あくまでも一応のそれであり，内容にわたって検討を加えた上での定義ではない。たとえば，「女房詞」の一種という場合，「女房詞」それ自体きわめて，すでに自明の概念かといえば，「文字詞」同様に，その発生や変移，語形や語義などにわたって未分明の部分の多い概念である。さらに，「文字詞」が「女房詞」の一種であるとすれば，「女房詞」を構成する何種類かの語群における「文字詞」の位置や相関的性質を明らかにせねばならないわけである。ついで，「文字詞」という名称に直接かかわることがらであるが，もとの語の頭の一音か二音を残し（後部省略し）て，「もじ」という語形を付加する所以は何かをも明らかにせねばなるまい。おなじく「女房詞」を構成するものに，「もの」を後接させる一群があるが，これとの比較検討も当然のこととして必要となるであろう。

II　「女房詞」の発生と変移

先述したように，「文字詞」は「女房詞」の一

種である。「文字詞」の発生や変遷は，まず「女房詞」のそれに内包されると考えてみるべきであろう。そのうえで，さらに「女房詞」一般の発生と変遷の様相とは異なった「文字詞」独自のそれが存するか否かを検討するのが妥当であろうと考える。

前節に示した三種類の辞典の記述において，それぞれに，「発生と変移」についてのものが見られる。「国語学大辞典」では，「不快感・不潔感等を喚起しやすい事物の明示的な名称を直接口にするのをきらって，代わりに独特の婉曲表現を用い言い換えたもの」としており，発生の原因は「婉曲表現による言い換え」と考えている。また「国語学研究事典」では，「女性中心の狭小な特定社会で使われ始めた」としたうえで，「発生の原因には，婉曲表現説・言語遊戯説・待遇表現説・忌詞説・隠語説などがある」と紹介するにとどまっている。さらに「国語史辞典」では，「御所の女房たちが考案し，使用していた特殊な語彙」とし，その発生については「遊びやたわむれ，女らしく優美に可愛らしく表現したいという気持，あるいはそれらがからまり合って，かりそめに言い出された言葉が，閉鎖的な環境の中で，仲間意識や特権意識に支えられて，いつの間にか固定していったものであろう」としている。

以上の所説を要約すれば，「女房詞」の発生の場としては，御所の女性・女性中心の狭小な特定社会・御所の女房たちが考案という風に，いずれも「閉鎖的な環境（宮廷の女房）」と考えているようである。そして，次に発生の言語学的な要因として，婉曲表現説・言語遊戯説・待遇表現説・忌詞説・隠語説と併記されているが，これからはみ出る考え方としては，「かりそめに言い出された言葉」という小松寿雄氏の言がある。それは言語遊戯説の一部と重なり合う部分をも持つとも考えられるが，「文字詞」に見られる「同一表現語形の多義（異義とでも言うべきかもしれない）用法」や，「同一物の多数表現語形」といった，一般的な語彙の世界では考えられない様相などを考えるに当っては重要な発想であろうと考えられる。このことは改めて後に述べる予定である。

なお，「国語史辞典」において，造語法と命名法の特色として，次の六項をあげているのは注目されるところである。（用例は省略）

①語の省略による造語
②省略し，くり返して造語したもの
③「もじ」を付けたもの
④対象の性質・印象，対象から思い浮かぶ連想等によって命名したもの
⑤「もの」の接尾による造語
⑥語源に諸説あるもの

造語法とか命名法という表現が用いられているが，いわば，発生の言語学的要因と見ることのできる性質のものである。ただ，要因というには，やゝ形態（語構成）に重きを置いた嫌いはあるが，この分類処置の中から，あるいは，特色ある性質が見出せるかも知れないのである。このような意味で，国田百合子氏の述べるところは，興味深い。氏は「女房詞」の文献としてきわめて重要な位置にある「海人藻芥」「大上臈御名之事」「御湯殿の上の日記」の三書について，記載される「女房詞」の語構成を次のように説明している。[註5]

≪海人藻芥≫

①省略語
　1），一字省略　ワラ（蕨），スイハ（椙原）
　2），二字省略　マツ（松蕈），ヒキ（引合）
　3），三字省略　ツク（つくづくし）
②ものことば
　ホソモノ（索麺），シロモノ（塩）
③もじことば（省略語＋もじ）
　コモジ（鯉），フモジ（鮒）
④古来からの慣用語
　グゴ（飯）
⑤下流社会からの流入語
　ムシ（味噌）
⑥漢よみをさけて和よみにしたもの
　ヲメグリ（御菜）

⑦漢よみのもの
　クコン（九献…酒）
⑧音転化
　カチン（餅）
≪大上臈御名之事≫
①省略語
　イ語尾省略
　　1），一字省略　わら（蕨）
　　2），二字省略　たけ（たけのこ）
　　3），三字省略　つく（つくづくし）
　ロ語頭省略
　　1），一字省略　まき（ちまき）
　　2），二字省略　にやく（こんにゃく）
　ハ御＋省略語　おはま（はまぐり）
②ものことば（形容詞の語幹＋もの）
　あと物（菜）
③もじことば
　イ，省略語＋もじ　いもじ（いか）
　ロ，異名＋もじ　こんもじ（ゑそ）
④畳語
　イ，異名の畳語　あかあか（あづき）
　ロ，省略語を重ねたもの　するする（するめ）
⑤御を冠したもの
　イ，御＋普通語　御しる（汁）
　ロ，御＋異名　御まな（魚）
⑥音転化　かちん（餅）
⑦擬声語　ぞろ（そうめん）
⑧ものの形　ひらめ・かため（かれい）
⑨文字の形　ふたもじ（にら）
⑩色彩　こうばい（このわた）
⑪そのほか　むし（味噌）
≪御湯殿の上の日記≫　（用例は略す）

本書に初めて見える女房詞は，食料品，道具，人事，人名，数量，衣料，年中行事，神事・仏事，時刻，植物，動物，住居の12項目に及び，①異名，②御＋異名，③御＋普通語に分類できる。語構成としては，次の如くに分類できる。

①異名
　イ，単なる省略語
　ロ，省略語＋もじ
　ハ，限定詞＋もの
　ニ，限定詞＋体言
　ホ，限定詞＋もじ
　ヘ，単なる異名
②御＋異名
　イ，御＋省略語
　ロ，御＋省略語＋もじ
　ハ，御＋限定詞＋もの
　ニ，限定詞＋御＋体言
　ホ，御＋限定詞（＋御）＋体言
　ヘ，御＋異名
　ト，御＋省略語＋もの・こと・ども
③御＋普通語
　イ，御＋普通語
　ロ，御＋限定詞＋もの
　ハ，限定詞＋御＋普通語
　ニ，御＋普通語＋もの・こと・ども

以上，三書について，それぞれに多少の違いはあるが，いまは，その違いを問題にするよりは，このような語構成を見せる「女房詞」の発生に，どのようなかかわりが見出せるかが大切である。最後の「御湯殿の上の日記」の語構成において示された①「御」を冠するものと是を有しないもの，次に②「異名」と「普通語」，さらに③「省略語」＋「もじ」と「限定詞」＋「もの」といった要素は重要かと思われる。まず①の「御」の有無であるが，現代日本語に見られる「御」（お・おん・み・ご・ぎょ）の多用，とくに「御」（お・おん）の広範囲な用法については，つとにその源を「女房詞」に求められてきた。対人関係において，特に敬意を必要としない言語の場にあって，これが頻繁に用いられるのは「御湯殿の上の日記」が早い文献である。蓮如の御文章や「本福寺跡書」[註6]などには「御」を冠した語が多用され，これらに殆ど振仮名が付されているところから，その音訓よみが判然とする点では大切な資料であるが，これら文献においても，その「御」の使用は敬意の存在を前提とするものに限られていると言ってよいであろう。この「御湯殿の上の日記」に見られる

記述は，代々の女房の書き継ぎになるものであり，特定個人の対人関係を示すものではなく，また，官職上敬語表現を必要とする上申書や公式記録といったものでもない性質から考えて，「御」の多用はすでに敬意の表現ではない部分を持っていると考えるのは妥当であろう。さて、敬意をうすくした「御」は，その言語表現として，どのような意味・ニュアンスを保持したのであろうか。中古・院政期に数多く存した女人の手になる日記・随筆の類において，他のとくに男子の手になった同類のものに比して「御」の使用が多いとすれば，それは「女性なるが故の表現」の一つと認められよう。しかし，諸文献はその事実を示してはいない。中古以来の女性の手に成った日記・随筆の筆者とされる女性たちは，いずれも宮廷の女官たちであった。「御湯殿の上の日記」の筆者もまた，宮廷内の女房である。ただ，前者が教養ゆたかな文才のある女官たちであったのに比して，後者は，おそらくは，それほどに教養ゆたかであることは求められていなかったであろう。また前者の記した作品は，いずれも日記・随筆と名づけられてはいるものの，筆者にとって，それは他人によって広く読まれることを意識して記されていると考えられているのに対して，後者のそれは，一種の記録とはいえ，おそらくは誰の目に触れることも予期されぬものであったろうと考えられる。このことから，「御湯殿の上の日記」の文章は，あまり気を張らない，身分の低い女房たちの日常職場での言語が，比較的安易に表現されていると考えられるのではあるまいか。

ついで②の「異名」であるが，これには「省略語」「畳語」「擬声語」などが含まれるようである。これらは，現代日本語の世界で見るならば，「幼児語」の示す特徴に似ていると言えよう。それは，まず何よりも言語の場における即物的使用を前提とする。具体的な物が存在し，その名称が既知の対人関係の間において，はじめて通用する言語である。そこでは，極端な場合，よく長年つれ添った夫婦間の会話として，アレとかコレとか，ドウシテとかコウシテとか，具体的言語内容を持たない指示語的言辞が多用され，それで充分に言語通達が果たされることと，相通ずるものがあると考えられる。恣意的な省略や，二音節畳語，擬声語などは，ことばに対する教養や語感を前提として，すこしでも効果的に練り上げられるといった性質は見られない。それらは，きわめて感覚的・情緒的なものである。年若い女性のみの職場などに起る独特の流行語的現象にみられるものと酷似していると考えられるのである。

なお，最後の③「省略語」＋「もじ」と，「限定詞」＋「もの」については，改めて詳細に検討を加えたいと思う。

さて，発生についての考察を，一まず終えて次に，変移の面に移ることにしよう。先きに述べた辞典類では，「優雅な上品なことばとして宮廷を離れてしだいに拡がって行った」，「女房ことばは優雅さのゆえに〈中略〉一般の女性語に大きな影響を与えた」，「弘安四年の日蓮書簡に『味もじ一をけ』とあり，この頃すでに女房詞が僧や武士までひろまっていた証拠かとされる。〈中略〉近世には更に普及し，元禄の『女重宝記』によれば『御所方のことばづかいなれども地下に用ゆること多し』という状態となるが，なす，しゃもじ，お目もじ，あをものなど，現代に通用する語も多い。」などと述べている。前二者の典拠となったのは，おそらく，「海人藻芥」にある「内裏仙洞ニハ，一切ノ食物ニ異名ヲ付テ被召事也。一向不存知者。当座ニ迷惑スベキ者哉。〈中略〉近比ハ将軍家ニモ，女房達皆異名ヲ申スト云々。」によるものであろう。具体的な例としては，狂言の「お冷し」[註7]に次のように見られる。

主「汝はあのたきのおひやしをむすんでこいト云　して「なんの事で御ざるゾト云〈中略〉主「おのれがいやしいやつじゃによっておひやしト云事ヲしらぬハ　して「上つかたのきやしゃな女房達のおしやルハ存ぬがこなたの大キイロからおひやしのむすんでの人が笑ト

云テ笑　主「にくいやつじゃ此やうなきやしやナ言葉ヲおしゆるヲ忝トハおもわひでばちがあたらうぞたしなめト云

また，豊臣秀吉の書簡には，次のような用例が多数見られる。

北政所宛書簡　御めにかゝり候はん事，はもじにそもしへはかりはくるしからすと存候へとも，（下略）

加賀殿宛書簡　このこもしそもしへとちくせん内みやけにこし候。

さらに，笑話本「醒睡笑」[註8]巻三「不文字」の中の次の笑話も具体的な様相を伺わせるものの一つである。

侍めきたる者の，主に向ひ，おかべの汁，おかべの菜といふを，「さやうのことばは女房衆の上にいふ事ぞ」としかられ，げにもと思ひゐけるが，ある時主の上臈に供して振舞より帰りたるに，主人座敷の始終を問はる。「朝食の上に囃の候ひつる」とかたる。「謡はなになに」などありしかば，「しかとは存ぜず候。なにも豆腐越しに承りてあるほどに」と。

最後にもう一つ，「浮世風呂」三編之下[註9]にみえる屋敷者と娘の会話をあげておこう。

初「ホンニまことに感心だネェ。私どもは百〈ひとすぢ〉で調た米〈うちまき〉を一度にいたゞいても此真似は出来ません　むす「ヲヤ，廻りくどい事をお云ひだのう。百が米を一時に給てもとお云ひな　初「ヲヤ，おむすさん。いかな事ても。ヲホ……。いっそモウ感心なお子さんだねねェ　むす「私は名代のおてんばだ物を。ハイ，おちゃっぴいとおてんばをネ。一人で背負ております。夫だからネ，感心なおしゃもじだよ。おさめ「ヲヤヲヤ，おしゃもじとは杓子の事でございますよ。ヲホ……　むす「おさめさん。ほんにかへ。私は又おしゃべりの事かと思ひました。鮓をすもじ。肴をさもじとお云ひだから，おしゃべりもおしゃもじでよいがネェ　初「いかな事てもおまへさん。ヲホ……　おさめ「やがてお屋敷へお上りだとわかりますのさ　初「さやうさネェ。おしつけ御奉公にお上り遊ばすと，夫こそ最う大和詞でお人柄におなり遊ばすだ。（下略）

以上，二三の具体的な用例をあげたが，宮廷女房達のきわめて狭い閉鎖的な社会にあって生まれた「女房詞」のあるものが，どのようにして，他の社会へ広まったのかについて，示唆を与えてくれるものと考えられる。狂言「お冷し」の例では，田舎大名が「おひやし」「むすぶ」という「きやしや」な言葉を使ったのに対して，冠者が「上つかたのきゃしゃな女房達の仰るは存ぜぬが，こなたの大きい口から」では滑稽そのものだと笑うのである。そこには「女房詞」は「上つかたのきゃしゃな言葉」と考えられており，大名がそれを用いた心の中には，その上つ方の風流な言葉遣いに対する憧憬が見られる。土着の豪族から戦国大名という力量を身につけて来た田舎大名にとって，やはり都のたたずまい，とくに天下を治める将軍家や公卿たちの在り様（文化・教養）は，正しく憧憬のまとであったに違いない。系図買いが流行した時代である。身なりや言葉の模倣が流行しても少しもおかしくはない。この「上つ方のきゃしゃな言葉」への「あこがれ」が，「女房詞」が宮廷を出て広がって行く原因の一つであることは認めてもよいであろう。また「醒睡笑」の話では，「侍めきたる者」が，「おかべ」という語を使い，主から「それは女房衆の上にいふ事ぞ」と叱られるというものである。「女重宝記」の中に，「右は御所方のことばづかひなれども，地下にも用ゆること多し」と記されてあるように，主に仕える「侍めきたる者」までが「女房詞」を用いた証拠になるものである。この「侍めきたる者」が，何故に「女房詞」を用いるに至ったかは，此話からは不明であるが，同じ書に，信長が，同じく「豆腐」――「かべ」をもじった逸話が収められているところを見るに，少くとも，この「女房詞」は，武将の間に知られ，もてはやされていたと考えることはできよう。おなじく笑話本である「昨日は今日の物語」において，「そ

もじ」や「わかもじさま」が用いられていることも，その使用の度合いを知らしめるものといえよう。ついで「浮世風呂」の記載について考えてみよう。「ひとすじ」「うちまき」という「女房詞」が見えるのであるが，これを使う屋敷者のお初に対して，娘の言葉は「百が米を一時にたべてもとお言ひな」とあり，世間一般の表現を対照させている。その上で，「おしゃべり」を「おしゃもじ」といわせて，それは「すし」が「すもじ」「さかな」が「さもじ」となるのと同じ方法だと言わせているのである。ここには，単なる使用例ではなく「女房詞」の中の一つである「文字詞」の語の構成法を説き明かして見せている。この言葉に対する理解から「新しい語の構成」への意欲は，当時の「物書き」にとっては興味深いことからであったと思われる。近松が作品の中に「文字詞」を多く作り出して用いたと考えられるのもうなずけるところである。また，この知識は，物を書く人々の間だけに留まることなく，観客や読み手にも理解されていたと考えられる。

III　「文字詞」の発生と変移

前節で述べた「女房詞」の発生と変移の内容を前提としながら，「女房詞」の中の一種と考えられている「文字詞」について，その発生と変移を考えてみたいと思う。

まず，田安宗武の所論[註10]から見てゆくことにしたい。「文字を付て言あり。鯉をこもし，鮒をふもしのたぐひ，いとおほし。これらは若は延政門院のいときなくおは（し）ましける時，こひしくおほしめすとあることを隠してよませおはしましつる御歌より，ひが心得て，かくしいはんには文字もていふそと思ひたるにや。彼御哥は，この字をは二つもじ，いの字をはうしのつのもしなと，字のかたちをこそのたまへれ，鯉をこもし，鮒をふもしなと其かしらの一言にもじ付ていふはゆゑなきわざなめり。」これは「文字詞」の由来を，「徒然草」62段「延政門院いときなくおはしましける時，院へまゐる人に，御ことづてとて申させ給ひける御うた　ふたつもじ牛のつのもじすぐな文字ゆがみもじとぞ君はおぼゆる　こひしく思ひまゐらせたまふと也」に求め，「ふたつもじ」は「こ」，「牛のつのもじ」は「い」，「すぐな文字」は「し」，「ゆがみもじ」は「く」という「文字の形」の形容が本義であって，「こもじ」や「ふもじ」のように「もじ」をつけてもとの語を隠すのは，いわれのないやり方であると難じたのである。宗武の論にも一理あるが，本末転倒であるといわざるを得ない。一般に用いられる「文字詞」は，「こもじ」「ふもじ」の方なのである。「近松語彙」には「文字詞は，足利時代の末期朝廷式微にして供御の物備はらない為，女官等その物の名を呼ぶを忌んで，何もじというた隠語から起ったと云ふ。」と説かれている。なお，高橋龍雄「日本百科大辞典」にも「戦国時代皇室式微の極に達せし時，禁中の女房どもも，町人並の食品又は其他の衣服，調度等を得べからざるを以って，其もとの名を朝廷にて言ふを恥ぢて，何『もじ』と呼ぶに始まれりと云ふ」と見える由である。[註11]いずれも「隠語説」を取っているのであるが，隠語という用語は，現代語の世界では「特定の仲間にだけ通用する特殊な言葉」といった意味がつよい。ここに見られるのは，「避けたい」という気持から発生した造語と見られ，どちらかと言えば「忌詞説」と言うべきもののようである。現代語的な意味で用いる「隠語説」は，「女房詞」自体の発生（もちろん「文字詞」も含むのであるが）過程を見れば，殆どの人々が「宮廷の女房達」とか「閉鎖的社会」とか「狭小な社会」という場を設定しており，そこに生じて，その小社会小集団の共有物として固定（乃至は，一時的流行）したものという認識は共通しており，「女房詞」にその性質が内在することは，全く異論のないところである。さて，注目すべき見解を次につけ加えよう。

「しゃれ」と見る見解。（国田百合子説）[註12]

弘安四年の日蓮書簡「聖人一つつ。味文字一

をけ。生和布一こ。聖人と味文字はさてをき候ぬ。生和布は始にて候。」について，「聖人」は禁制品酒の異名として，緇衣の間にある隠語ではなく，むしろ，しゃれた用法とみるべきではないか。而して，味噌は，酒を聖人といったことに応じさせるしゃれとみたい。かように考えると，「もじ」はその起源に於て，果して隠語的意識を持つものであるかどうか疑わしく思われる。むしろ，日蓮書簡の「味もじ」の「もじ」は，一種のしゃれ，機智とみてよいのではなかろうかと考えられる。

「鯉ハコモジ，鮒ハフモジ，鶫ハツモジ」の「もじ」は，前述の「味噌」の異名「味もじ」に通ずるもので，一種のしゃれ機智からのものであると思う。これについて，金田一京助博士は，「鯉とか鮒とかいうと直接的になり，生々しくなるところから，露骨にいわずに「……もじ」というので，美化法（Euphemism）であろう。これらはよい意味のしゃれで，修辞的要求からくるものであろう。」（直話）といっておられる。「ユニークなものをさす」と見る見解。（堀井令以知説）[註13]

文字詞は，もともと使用のたびにユニークなものをさすものとして用いられたもので，文脈や場面が分からなくてはその意味を決定できないものであった。場面によって価値が定まるところに文字詞の本質がうかがえる。一般に普通語の呼びおこす表現は，常に同一性を予想するが，文字詞の使用においては，談話の現実に対応してユニークな存在として実体がきめられる。文字詞は普通語のような客体的表現ではなく，話の現実の刹那によって意味がきまり，限定的ユニークな場面に意味が左右され，単一的一回的性格をもっている。しかも，現実の事柄や史実を無視できないものである。文字詞の中には，鮨を意味する「すもじ」のように次第に固定した意味へと向ったものもあるが，一般に当事者が意味の決定に果す役割は普通語よりも大きいのである。

両者の見解を，できる限り短く，しかも必要な部分を，その著書や論文の中から抜き出して記したのである。国田説の「しゃれ」は，まさに金田一氏の言として紹介された「よい意味での」ものであり，露骨な生々しいものでない，おぼろな，ほのかな，奥ゆかしいもの，つまり，原語の頭音節のみを残す省略と，その部分を埋めた「もじ」の性格を，このように理解しているのであろう。たしかに，聖人（酒）と共に用いられた「味もじ」に，「あからさま」を避けそこから推察させる「機智」（或は言語遊戯とも云えようか）の要素を見ることはできよう。また，「典侍」を「すもじ」，「大典侍」を「大すもじ」，「新典侍」を「新すもじ」などと，女官の官職名に「文字詞」が多く用いられるのであるが，これらは，堅苦しい官職名を避け，ほのかな機智に豊んだ形容と言えよう。ところが，「御所御所昨日のまま御しこうにての御ひしめきあり。いもじもをなし」（長享2）の「いもし」は人名「いわ千代」であり，「大すけよりかき一ふたまいる。いもしより一ふたまいる。」（永禄1）の「いもし」は人名「伊予」と理解され，さらに「御いのこの御いはゐいつものごとし。（中略）いもしまいりて御所にて御さか月まいる」（長享1）の「いもし」は「亥子餅」であり，「はくよりさかひての御ひら，いもしもまいる」（明応4）の「いもし」は「鳥賊」であるという。これらは何れも「御湯殿の上の日記」に出てくるものであるが，このように全く同一の語形「いもじ」が，用いられる場面によって，それぞれに意味を異にするという現象に対して，「しゃれ」とか「機智」とかいった性質と理解することはできるのであろうか。「謎解き」とでも解して「機智」を云々することはできようが，実際の用例は「日記」記録なのである。それも単一の人物の覚書き風な日記ならば，当意即妙な省略語形が用いられても，或は理解可能であるかも知れないが，「御湯殿の上の日記」は，長い年月にわたり，数多くの女房たちによって書き継がれて行ったものである。後世の我々は，書かれた日記の前後の記載を読み較べ，前後の事実関係から推し

て，この語形の意味するところを推定することは，おおむね可能ではあるが，これを書き記していった女房達の頭脳の中で，その都度に記すべき異った内容（人名であったり，しかも複数の，食物であったり，しかも是も異種の）を，その度ごとに「いもじ」という同じ語形で記しとどめることに奇異の思いか，すくなくともかすかな疑問すら起ることなく，奥ゆかしい「しゃれ」た「機智」ゆたかな表現という，いわば満足に近い気持が働いたことは，やはり考えにくいのではなかろうか。「しゃれ」と見る説の欠点の一つと思われる。

一方，堀井説の「ユニークなものをさす」と見る見解は，いま述べたところの，一つの語形が異った数種の原語と対応する現象の解明に焦点を当てた見解と見られる。たとえば，この現象の最たるものをあげれば，「くもじ」があげられよう。「おとこたち申のくちにてくもしまいる」（天正 15）では「酒」，「はなさかりにておもしろく，御ひしひし，くもしなとありて御さか月あまたまいる」（文明 9）では「盃事」の意。「うちのほうをん院よりくもし二をけ，むめ一をけまいる」（文明 14」は「茎漬」の意であり，「とんけゐんとのははやくくもしなる」（天正 9）では「還御」の意となり，「なかはしと，たかくらとのくしの事，四辻大納言，くわんしゆ寺中納言に松木中将，権佐して一日の御くもし事おほせきかせらるる」（永禄 3）の語義は「公事」と見られる。また，「夕かたさかもとのふけへ木沢かくもしのほりて，人々みるよしさたあり」（天文 11）は「首級」の意と考えられ，「なかはしよりくもしのかもしこしらへてまいる」（天正 17）のそれは「栗」の意である。このほかにも「にんにく」の意のものや，「くもじながら」の形で「恐れながら」の意になるものなどもある。このように同一の語形に多数の異なった意義が対応することは，一般の語においては考えられないところである。それぞれに，原語の頭の一音節を残し，それに「もじ」を添えるところから同一語形になるわけであるが，それで，言語使用者（記した者と読む者の両者が少くとも，当時の宮廷女房たちの中において存在したであろう）にとって，いささかも不便ではなかった，少くとも一定期間にわたって，それは特に不都合を惹起しなかったと考えざるを得ない。もし，きわめて不都合で，相互に理解しえなかったとするならば，直ちに是正の方途が考え出されたに違いないであろう。上記の中，「酒」と「盃事」は意味の派生として理解しうる。原語の「九献」は共有するものである。しかし，「茎漬」「還御」「公事」「首級」「栗」となると，関連を求めることは不可能である。日記として，日次の記事が連なっているから，前後の記載を読み較べることによって，行事か事件か食物か進物かの判断はつけられるが，しかし，これだけのものを，同一語形で取り扱うという言語感覚は，どう見ても普通語と同質のものとは言いえない。この日記の文章の，いわば記録にとどめ，素気ない記しかた，覚帖かメモ風な様子からして，考えられることは，一種の記号的要素の強いものではないかとも考えられる。堀井説は此点を注目して「ユニークなものをさす」と考え，それは文脈によって決定されると述べたものと思われる。この同一語形で異種の数語を表現するという現象については，堀井説は説得力があると思われる。しかしながら，「文字詞」には，もう一つの側面がある。たとえば，女官の官職名として用いられる「大典侍」に対し，「御ゆする大す。めめす御まいり」（延徳 2）の「大す」，「大すもしよりあめ一をけまいる」（文明 14）の「大すもじ」，「大すけとの，いけ御もしよりところの御ふたともまいる」（永禄 3）の「大すけ」，「あさ御さか月まいる，御こわく御大もじ，なかはし，いよ殿三こんまいる」（明応 6）の「大もじ」，「御ゆめす，おすもし御まいり」（文明 17）の「おすもじ」の五つの語形が対応している。原形・省略形・もじ形・変形というぐあいに，さまざまな形が見られる。これら相互の間に，何等かの差異が見られるかといえば，「おすもじ」の例がきわめて少数であるぐらい

で，他はとくに違いは認められないようである。この現象に対して，「文字詞」は「ユニークなものをさす」と見て，それは普通語と異なり，言語の場・文脈が意味を決定すると言いうるであろうか。語義について，文脈が決定するという性質は，広く言えば言いうるところであるが，堀井説は，同一語形の異なった意義について説かれているわけである。いま，取り上げているのは，同一内容の表現における違った語形の問題である。同じ内容であることは，文脈によって始めて知りうるところであるが，それを，様々に語形を替えて表現する意味は存しない，とすれば，その様々の語形は，言語行為者（書き手・読み手）にとって同一のものでしかありえないことになり，これら数種の語形は恣意的な様相としか言いえないことになるわけである。なお，この「省略形」「もじ形」「原形」が同じ文面の中に共存する現象は，「女房詞」全般に，程度の差は見られるが，共通の現象である。

Ⅳ　「文字詞」の分析

本稿に先立って，「文字詞一覧」を示したがそこには，総数二七七語を収めた。その中から「意味不詳」「具体例欠除」「文字詞と異質」として後部に一括した四八語，及び，配列内部に入れたが，改めて最後尾の「異質なもの」へ移すべきもの二語（「ろのじ」と「めのじ」）を除いた二二七語を対象として考察を進めてみることにする。

語構成による分類。

見出し語の後に，初出用例と見られるものを初めとして，若干の用例を付しておいたが，これらを手懸りに，まず，「海人藻芥」「大上臈御名之事」「御湯殿の上の日記」に見られるもの㋐と，近世に入ってからの文献に初出するもの㋑と，上記三書にも見え近世の文献にも見られるもの㋒とに大別して考えてみよう。まず数字の上では次のようになる。

総数227語，㋐100語，㋑102語，㋒25語，注目すべきことは，㋐と㋑がほゞ同数に近く㋒が4分の1と少い点である。もっとも，それぞれ各語について，もっと確かに調査した上でなければ言えないことであり，いまのところは一応の目安といったところで留らざるをえないものである。しかし，大体の傾向として捉えることはできるであろう。この三区分をふまえた上で，いくつかの検討を加えてみたいと思う。

「文字詞」の語構成の上からみて，㋑省略語＋もじ　㋺お＋省略語＋もじ　㋩限定詞＋もじ　㋥お＋限定詞＋もじ　の4種類に分けてみると次のような数値がみられる。

㋐100語	㋑60語	㋺9語	㋩31語	㋥0
	(60%)	(9%)	(31%)	
㋑102語	㋑74語	㋺24語	㋩4語	㋥0
	(72.6%)	(23.5%)	(3.9%)	
㋒25語	㋑23語	㋺1語	㋩1語	㋥0
	(92%)	(4%)	(4%)	

この中で特徴的なものは次のとおりである。

1　㋑＋㋺つまり「省略語＋もじ」が191語全体の84%を占めている。
　㋩＋㋥つまり「限定詞＋もじ」は36語で全体の16%弱と少ない。

2　㋩つまり「限定詞＋もじ」（㋥は0である）36語の中，㋐に属するもの31語で，86%，㋑に属するもの4語で11%，㋒に属するもの1語で3%弱である。

3　㋺つまり「お＋省略語＋もじ」は34語あり，㋐に属するもの9語で24%，㋑に属するもの24語で73%，㋒に属するもの1語で3%である。なお，㋥つまり「お＋限定詞＋もじ」は例がない。

各項に対して，若干の考察を加えてゆきたい。まず≪1項について。≫

総体として「文字詞」を造り出している構成としては「省略語＋もじ」が多い，全体の8割を越える数値は，それだけで注目すべき性質とも言えよう。さらに，この「省略語」の形に目を向けてみよう。[註14] 原語の語頭からいくつの

音節を「省略語」として残存しているかによって種別してみると，次のようになる。

a，語頭の一音節を残して，あとを省略して「もじ」を付したもの。たとえば，あもじいもじ，うもじなど。なお，大もじ・きゃもじ・しゃもじ・じょうもじ・はうもじ・ゆうもじ・りょもじは，この中に含む。総数149語（78%）　うち「お」を冠するもの29語。これを先述のⒶⒷⒸに分けると次のようになる。

総数149語　Ⓐ53語　Ⓑ73語　Ⓒ23語
「お」29語　Ⓐ8語　Ⓑ20語　Ⓒ1語

b，語頭の二音節を残して「もじ」を付したもの。たとえば，あだもじ，あんもじ，いそもじなど。

総数34語（18%）うち「お」を冠するもの5語（おきゃくもじ・おすいもじ・おせんもじ・おそくもじ・おちゃのもじ）。これをⒶⒷⒸに分けると次のようになる。

総数34語　Ⓐ8語　Ⓑ25語　Ⓒ1語
「お」5語　Ⓐ1語　Ⓑ4語　Ⓒ0

c，語頭の三音節以上を残して「もじ」を付したもの。すべて8語（ごけんもじ・ごんすもじ・しん大すもじ・しん大もじ・しんすもじ・しんなもじ・すいくもじ・めめすもじ）。これをⒶⒷⒸに分けると次のようになる。

総数8語　Ⓐ6語　Ⓑ2語　Ⓒ0

aにみられるように，省略語＋もじの構成をもつ「文字詞」のうち約80%が，原語の頭一音節を残すものであることがわかる。ⒶⒷⒸの割合については，全体の比率とかわらないが，「お」を冠するものについては，Ⓑの数価の大きさが特徴的である。これは，近世以後の用例が文章内でのものが多く，詞寄せ中心の資料ではないところに在るように思われる。つまり，やはり丁寧な語という意識が働らき，「お」を重ねていると考えられる。

bにおいては，総体としてⒷの占める比重が多大である。これは後に述べる語義による分類とも大きくかかわるところであるが，早い時期の「文字詞」と，近世になってから生まれたものとの差異の一つと考えられる。

cについては，Ⓐの6例が特色のあるものである。これは総べて女官の官職名である。もっともこの官職名がすべて三音節以上を残すのではなく，すもじやゑもじ，大もじやなもじなども存する。

つぎに≪2項について≫

「限定詞＋もじ」という語構成は，具体的に言えば，たとえば「あをのもじ・あか御まなのすもじ」のようなものを言う。「あを（青）の（海苔）もじ」「あか（赤）御まな（鮭）のす（鮨）もじ」というように，「のもじ」「すもじ」という「文字詞」（省略語＋もじ）の前に離れ難く修飾限定の詞が連接して，一語を成していると考えられるものを言う。これに属するものがⒶに多いわけであるが，前記「文字詞一覧」を見ればわかるように，すべて「御湯殿の上の日記」の中に見えるものであり，他の詞寄せ的性格を持つ文献類には見えないものである。またこの種のうちⒷに属するものは，「しろゆもじ（白湯文字）」「すいくもじ（酢茎）」のような類いであり，Ⓒの1語は「すもじの花」を当てた。やや趣を異にするが，「すもじ」で語を切るよりは「すもじの花」で一語とする方が妥当と考え，後方につく限定詞というより，もじ詞が限定詞として働いていると考えるべき構成だが，便宜上，ここに入れておいた。

最後に≪3項について≫

「お」を付した「省略語」＋「もじ」という語構成を持つものである。「限定詞」＋「もじ」の方には用例が見当たらないが，これは「限定詞」内部に「御」をもつ例もあり，（あか御まなのすもじ）必要と思えば，このように中の語（それだけ結合がゆるいと考えられるが）に「お」を冠しうるものと考えてよいのではなかろうか。なお，先述の1項のa，bの個所で触れたことは，当所においても考えるべきことがらである。㊀という項を立ててみたが該当する語はない。

形式的な組み合わせから分類の項目を立てることの危険性を思い知らされたところである。

語義による分類。

ここで，視点を変えて検討を進めたい。「文字詞」は位相語としての一定の集合体である。これを語義の面から考えてみる必要があるであろう。「女官用語」をその社会行動に則して分類したもの[註15]によれば，「女房詞」は（四）「日常の生活行動に関する用語　に属し，これを「家族関係・身体関係（身体各部位・生理現象・粉飾等）・衣類・生活用具・食生活（食品・食具）・経済行動（金銭・購買・消費）・起居進退（起床就寝・洗面・入浴・排泄）・交際などに分類する。この中，近世及びそれ以前の記録にのぼるものは，主として衣類・生活用具・食生活に関するものである。」としている。また，直接「女房詞」について，これを「御湯殿の上の日記」について詳細に検討したもの[註16]としては，次の如き結果が示されている。（総語数355。）

①食料品191語
　米飯の部39，餅の部37，酒・酒肴の部21，魚貝・海藻の部36，野菜の部22，果物の部14，調味料の部6，その他の食物16
②道具　27語　　③人事　54語
④人名　17語　　⑤数量（序数詞）10語
⑥衣類　21語　　⑦年中行事　18語
⑧神事・仏事　12語　　⑨時刻　1語
⑩植物　1語　　⑪動物　1語
⑫住居　2語

この中，「文字詞」は，総数37語をふくんでいる。内訳は次のとおりである。

①食料品　19語（米飯　3，酒・酒肴　6，魚貝・海藻　8，野菜　2）
②道具　1語　　③人事　1語
④人名　12語　　⑥衣類　4語

先述の「女房詞」全体の①～⑫の項目における片寄りもはげしいが，その中に見られる「文字詞」の存在も，ずいぶん大きな片寄りを見せている。

ここで，これまで検討の対象としてきた「文字詞一覧」に示した227語について，語義上の分類を試みてみよう。項目は，上記「御湯殿の上の日記」の分類などとの比較もあり，なるべくこれと共通になることを考慮した。

(1)　**食物**　71語。Ⓐ49語　Ⓑ8語　Ⓒ14語
鮨　21，餅・飯　6，酒　8，茶　3，魚　12，野菜　11，海苔　3，漬物　3，その他　4〈おちゃのもじ（茶の子），たもじ（煙草），つもじ（鶫），みもじ（味噌）〉

「食物」については，その69％がⒶに属しており，その中の21語が「すもじ」，8語が「くもじ」である。Ⓑに属する8語のうち3語が「茶」で，他は「すいくもじ」（酢茎），「そもじ」（蕎麦），「たもじ」（煙草），「ねもじ」（葱），「しろきくもじ」（白酒）である。いかにも近世の生活を反映している語である。

(2)　**人論**　28語。Ⓐ4語　Ⓑ22語　Ⓒ2語
Ⓐに属するものは「あもじ」（姉），「おちもじ」（お乳の人），「上もじ」（上臈），「パもじ」（パアデレ）の4語である。Ⓒに入るものは「そもじ」（其方），「ぬもじ」（盗人）の2語である。この部全体の78％強を占めるⒷの語群に特色がある。「あだもじ」（仇者），「うもじ」（内方・妻），「おかもじ」（お上様（カミサマ）），「おきゃくもじ」（客），「おくもじ」（奥様），「おともじ」（乙御前・醜女），「かもじ」（母（カカ）），「かもじ」（上様（カミサマ）），「きもじ」（貴様），「ここもじ」（自称・私），「ごもじ」（御寮人），「そもじさま」「そもじどの」「そもんじ」（其方），「ともじ」（父様（トト）），「ねんもじ」（念者），「のもじ」（人名），「はもじ」（母（ハハ）），「やもじ」（遣手婆），「わかもじさま」（若衆様），「わもじ」（我身・対称），「わもじ」（若者）。これも，近世の生活を如実に反映したものと言えよう。

(3)　**心情**　45語。Ⓐ2語　Ⓑ41語　Ⓒ2語
Ⓐの2語は，「くもじながら」（恐れながら），「わもじ」（わずらい）であり，Ⓒの2語は，「おもじ」（恐れ）と「きゃもじ」（華車）である。91％を占めるⒷ所属の語は，「あんもじ」（按・案，心配），「いそもじ」（忙しい），「おいもじさ」

（いとしさ），「おきもじ」（気遣，気分，機嫌，気の毒），「おくもじ」（苦労），「おさもじ」（淋しい），「おすいもじ」（推量），「おせもじ」（お世話），「おそくもじ」（息災），「おはもじ」（恥しい），「おゆもじ」（ゆかしい），「おりょもじ」（慮外），「けもじ」（けったいな），「しんもじ」（心），「しんもじ」（親切），「のもじ」（残り多い），「ひもじ」（けだるい），「りんもじ」（悋気）などである。「御湯殿の上の日記」などでは此種が見られず，「文字詞」の発展という観点からは，語義別の分野では，この種がもっとも特色を示すといってもよいであろう。先述の発生原因として「しゃれ」・機智説が出てくる所以とも考えられる。

(4) **動作**　11語。Ⓐ4語　Ⓑ7語　Ⓒ0

Ⓐの4語は，「くもじごと」（公事），「おくもじ」「くもじ」（還御），「はもじ」（拝賀）である。Ⓑに属するものは，「お目もじ」「お目もじさま」，「げもじ」（見参），「ごけもじ」「ごけんもじ」（御見，お目にかかる），「ともじ」（取る），「やもじ」（やりくり，情交）である。ⒶⒷのちがいが，公家社会から武士・町人社会への変移を示しているように見える。

(5) **人名**　38語。Ⓐ34語　Ⓑ4語　Ⓒ0

Ⓐ34語のうち，「御所」名が9例（たとえば「あもじ御所」安禅寺殿，「おもじ御所」岡殿など），「典侍」（すもじ）の類が11例（たとえば「大すもじ」大典侍，「しん大すもじ」新大典侍など）あり，いずれも「御湯殿の上の日記」に見えるものである。Ⓐの中から，上記二種20語を除いたのこり，14語について，うち7語が個有名詞・人名（「いもじ」いわ千代，「をかもじ」岡殿　など）であり，あと7語は役職名（たとえば，「ゑもじ」衛門内侍，「さもじ」左馬督　など）である。Ⓑの4語は，「すけもじさま」（介様），「せもじ」（遊女せやま），「ともじ」（人名とら），「ねもじ」（人名ねね）というもので，具体的な個有名詞である。

(6) **器物**　11語。Ⓐ1語　Ⓑ9語　Ⓒ1語

Ⓐは「あかのかもじ」（赤いかつら）のみである。Ⓑは「いもじ」（石），「おしゃもじ」「さもじ」「しゃもじ」（杓子），「おふもじ」（文・手紙），「ねもじのはし」（白箸），「のもじ」（糊），「ゆもじばこ」（湯文字箱），「いろもじ」（好色的な文章）といったものである。Ⓒの1語は「かもじ」（かつら）である。ここでは，ⒶとⒸの少なさが目立つところである。Ⓑの中には語形からみて問題のあるものもあるが，いまは触れない。

(7) **衣類**　11語。Ⓐ3語　Ⓑ4語　Ⓒ4語

この種類では，まずⒶⒷⒸの語数が大変均衡がとれていることに注目したい。一般的にⒸが少なく，Ⓑが多いのが傾向であることを思えばやはり特異な現象と見られるであろう。

Ⓐの語は，「御おもじ」（帯），「おねもじ」（練絹），「おゆもじ」（湯具）である。Ⓑは「いもじ」（湯文字），「ねもじ」（練絹），「ゆもじ」（腰巻），「しろゆもじ」（白湯文字）である。Ⓒの4語は，「おもじ」（帯），「こもじ」（紅梅衣裳），「ねもんじ」（練絹），「ゆもじ」（湯具）である。Ⓐは「お」を冠した語形のみであり，「ゆもじ」「ねもじ」は語形・語義を少々変えることによってⒶⒷⒸにそれぞれ属することになるわけである。Ⓒの「こもじ」以外は，時代性の弱いものであることがわかる。このような事情を見れば，この種類がⒶⒷⒸにわたって平均的な数値を示すことの意味も了解されよう。

(8) **人体**　2語。Ⓐ1語　Ⓑ0　Ⓒ1語

「かもじ」（髪）と「くもじ」（頸）の両語で前者がⒸ，後者がⒶに属する。身体部位の名称に「もじ詞」（一般的に見て「女房詞」も）が少いのは，これを婉曲表現と見る考え方に否定的な材料を提供する。女官にとって，あらわな身体部位の名称は避けたい類のものではなかったろうかと思われる。或は逆に，女官仲間における閉鎖社会内部のこと故，この遠慮は不要であったのかも知れない。また別な要素としては，身体部位の名称は音節数の少いのが一般である。ために「文字詞」の構成をとることが少なかったかとも考えられる。

(9) **動植物**　3語。Ⓐ0　Ⓑ2語　Ⓒ1語

植物ではⒷ「ねもじ」（根巻蔓）とⒸ「すもじの花」（董の花）の2語であり，動物は「きもじ」（狐）1語のみである。

⑽　**時刻**　3語。Ⓐ0　Ⓑ3語　Ⓒ0

「こんもうじ」（今朝），「せんもじ」（先日），「ゆうもじ」（夕方）の3語である。

⑾　**その他**　3語。Ⓐ1語　Ⓑ2語　Ⓒ0

「さもじ」（「さ」のつく語の通人用語），「ともじ」（徳政），「ゆうもじ」（幽霊）の3語で「ともじ」がⒶに属する。「さもじ」などは，特定の語とは言えず，まさに「符号」と見てもよいような用法といえよう。

以上，「文字詞」について，語構成の面と語義の面とから分類をこころみ，これと，室町期用法Ⓐ，江戸期用法Ⓑ，両期にわたるものⒸの大まかな時代的な差をからみ合わせて，いくらかの特質を考えてみた。さて，分析の最後に，人名の「文字詞」について検討を加えることにしたい。

人名の文字詞について。[註17]

「御湯殿の上の日記」は，文明九年（1477）から文政九年（1826）まで，およそ三五〇年間にわたって存する。このうち，文明九年から貞享四年（1687）までの分を「群書類従補遺」をテキストとして調査の対象とする。いま1470年から1680年までにわたって，10年ごとに「文字詞」および「典侍類」の頻度数を調べてみる。各10年ごとの単位において，同じ月数にはならない。それは潤月が存したり，記録の存しない月があったりするためである。そこで，単に10年単位で考察するよりは，記録の存する月数で考えた方が意味があると考え，10年単位の月数も記した。

（年代）	（月数）	（文字詞数）	（典侍類数）	（典侍類の文字詞数）
1470	32	83	134	69
1480	123	194	590	168
1490	124	294	403	262
1500	10	24	52	22
1510	／	／	／	／
1520	45	19	307	17
1530	124	6	738	0
1540	123	4	1099	3
1550	122	12	895	5
1560	124	6	895	1
1570	83	4	609	1
1580	71	0	817	0
1590	46	2	306	0
1600	86	0	277	0
1610	13	0	28	0
1620	12	0	31	0
1630	／	／	／	／
1640	1	1	12	0
1650	／	／	／	／
1660	／	／	／	／
1670	49	2	97	1
1680	89	12	199	4

「文字詞数」とは，人名の文字詞すべての用例数である。「典侍類の文字詞数」との違いはたとえば，「なもし」（納言，内侍），「ゑもじ」（衛門内侍），「あもじ御所」（安禅寺殿）などを含むからである。また「典侍類数」とは，「典侍」「大典侍」「新大典侍」「新典侍」「めめ典侍」「権典侍」の呼称を言い，それぞれに「典侍」に対して「すけ」「すもし」「すけ殿」が使用されるように，略称・もじ詞・敬称が用いられているが，これら総ての用例数を示している。

さて，この一覧から次のような特質を見ることが出来よう。まず，「文字詞数」において，総数は663語となるが，1470～1500の40年間（後土御門の治世）に全体の89%の使用が見られる。1470と1500は，それぞれ月数が32・10と少ないので10年間という扱いは妥当ではないが月平均としてみれば，2.59と2.4となり，1480の1.57や1490の2.37を上廻る。もし月数が十分に記録として存しておれば，此間の使用頻度はより高くなったであろうと考えられる。つまり「文字詞」の使用は，この40年間をピークとするものであることがわかる。あと，1520～1570の60年間で51（7.6%），1670と1680の20年間で14（2%）という使用の状態

である。なお，「典侍類数」について見れば，1470～1500の間では1179例（16%）と少なく，反対に1530～1560の間では3627（48.5%），または，1530～1580の間にあっては5053（68%）と，ほぼ半分を占めている。つまり「典侍類」総体としては1530～1580の間の使用が最も多いということになる。これに対して「典侍類の文字詞数」をみると，「文字詞数」と同様に，1470～1500の間が521（94%）と高く，1530～1560の間は9（1.6%）と低率である。「典侍類」全体の使用数の多寡と「典侍数の文字詞」の使用状況は一致せず，「典侍数の文字詞」は人名の「文字詞」全体の使用傾向に合致すると見ることができよう。

なお「典侍類」として，もう一つの特質をあげよう。この類には「典侍」に「すもじ，すけ，すけ殿」，「大典侍」に「大すもじ，大す，大すけ，大すけ殿」，「新典侍」に「新すもじ，新す，新すけ，新すけ殿」，「新大典侍」に「新大すもじ，新大，新大す，新大すけ，新大すけ殿」，「めゝ典侍」に「めゝすもじ，めゝす，めゝすけ，めゝすけ殿」，「権典侍」に「権すもじ，権す，権すけ，権すけ殿」の各語形が用いられている。つまり「もじ形」「省略形」「原形（かな）」「敬称形」の四種である。これらについて。

①「もじ形」と「省略形」は，1470～1500の間に使用が限定され（「大すもじ」については1670・1680に再出する），「原形」と「敬称形」は1520以降に多用される。

②また，「敬称形」は年代が下降するにつれて多く見られる。「もじ形」と「省略形」には敬称はつかない。これは，この語の位相として，大切な点である。

③「もじ形」と「省略形」は，同年代に混用され，若干「もじ形」の方が多い。このことから，「もじ形」が「省略形」の後から発生したものではないことがわかる。同一文章の中に並んで用いられる例も見られ，全く区別なく使用されたものと考えざるをえない。

おわりに

はじめに予定した検討内容について，なお不充分な考察しか加えられなかったが，いずれ機を得て再び取りあげることにしたい。前稿に掲げた「文字詞一覧」のうち，次の各項を訂正しておく。

● 13頁〔めの字〕の項，14頁〔3の字〕の項は16頁の「文字詞と異るもの」の中へ移す。

● 16頁〔ふもじ（文・手紙）〕の項に，「Fumonji（ふ文字）は女子だけが使ふ」「Fumonji（ふ文字）はFumi（文）を意味し……」（ロドリゲス・大文典）」を付け加えて，13頁の〔ふもじ御所〕の項の前に入れる。

●「すぐなもじ」・「ゆがみもじ」（徒然草）を16頁の「文字詞と異るもの」の中へ加える。

註1　金沢大学教育学部紀要　第31号の拙稿。

註2　国語学会編，昭和55，東京堂出版。この項執筆者は森野宗明氏。

註3　佐藤喜代治編，昭和52，明治書院発行。この項執筆者は松井利彦氏。

註4　林巨樹・池上秋彦編，昭和54，東京堂出版。この項執筆者は小松寿雄氏。

註5　「国語学研究辞典」所収の各項（書名）の解説による。

註6　日本思想大系17「蓮如　一向一揆」所収の本文による。

註7　天理図書館　善本叢書　和書之部　第二十四巻「狂言六義」下，百三十四ウ～百三十六オによる。

註8　角川文庫，醒睡笑上による。これには私に，内閣文庫蔵本との異同を書き入れ，さらに古典文庫影印の寛永整版との校異も記入してある。当話は，狭本寛永整版にも収録されている。

註9　岩波書店　日本古典文学大系63，「浮世風呂」p225。

註10　東京大学研究室本「くさむすび」。風間書房刊，「女房詞の研究」国田百合子著に収められた影印による。

註11　「女房詞の研究」国田百合子著の10頁に紹介されている。

註12　同上書，11頁。14頁。

註13　「文字詞の性質」堀井令以知。愛知大学文学論叢37（昭和44，5）

註14　「女房詞の研究」「国語学研究事典」などで，国田氏は，「一字省略」「二字省略」「三字省略」と，原語から省略された字数で種別している。

註15　大修館「講座国語史3　語彙史」の「第5章　近代の語彙II（島田勇雄執筆）」（317頁）女官用語を社会行動に則して分類すれば次のごとき類に収められる。　(1)女官社会の構成員の身分・職分等に関する用語（公的名称と成員間の通称）　(2)他の社会集団員の身分・職分等に関する用語　(3)女官としての職務上の用語　(4)日常の生活行動に関する用語　(5)精神活動に関する用語。続いて各項を詳説。

註16　「女房詞の研究」国田百合子著の第四編第二章106頁～189頁。

註17　ここに記述する内容は，その殆どを，昭和55年度卒業論文「文字詞の研究」（伊藤淳子）の第二章「人に関するもじ言葉」に記された調査結果に負うものである。